

# 英語深層文型の一試案 (I) ※

村田 忠 男

0. 本稿は、変形生成理論の研究成果を利用して、英語の深層文型を提案しようとするものである。

1. 変形生成理論が Chomsky によって1957年に提唱されて以来、既に17年になる。1965年に発表された *Aspects of the Theory of Syntax* は「標準理論」の言わば Bible であったが、それ以後、Fillmore の格文法、Lakoff, McCawley などの生成意味論が胎頭し、それに応じて Chomsky とも彼等に反論を加えつつ自らの理論を修正発展させ、それが「拡大標準理論」と普通呼ばれているのは周知の通りである。

本稿の拠って立つところは一応(拡大)標準理論であるが、場合によっては格文法や生成意味論の研究成果が間接的にはあるが利用されていることもあるし、(拡大)標準理論自体に賛成できない点がある時には敢えて疑問をぶつける場合もあろう。

2. 言語には三種類の recursive process が認められている。その内 conjunction と relativisation は、本稿では考察の対象から除外し、complementation のみ複文型設定の際に考慮することとする。

そこで私は英語の深層文型 (Deep Sentence Pattern) を単文型 (Simplex Sentence Pattern) と複文型 (Complex Sentence Pattern) の二段構えで提案するけれども、その区別は recursive S を含んでいるか否かでいい、かつ一つの文中に使用される recursive S の数は理論的には無限であるが、その生起しうる場所には制限があるのであるから、複文型の一覧を作る場合も、ただ一回の生起のみに限定することとする。

かくして、全ての深層文型をそれぞれの文の preterminal strings の枝分かれ図によって、9個の単文型と9個の複文型にまとめていこうとするのであるが、厳密に言えば lexical item の既に挿入されている深層構造 (Deep Structure) とは別の

ものであることを注意しておきたい。また、幾つかの文型に於ては、何らかの変形規則や統語テストに対して異なった反応を示す場合、さらに下位分類されているものもあるが、この下位分類は厳密にやれば切りのないものであり非常な困難を伴うものであるから、本稿では充分に一貫性をもって区分されているとは言い難いが、これは発展途上にある変形生成理論のワク組み内でやる以上、仕方のないことだと思われる。

3. 安井稔は「英語教育の中の英語学」の中で次のように述べている。

「つまり、従来わが国で行なわれてきた文型の概念というのは、アニアンズ (C. T. Onions) に基く5文型にせよ、パーマー (H. E. Palmer) やホーンビー (A. S. Hornby) に基く動詞型 (verb patterns) にせよ、いずれも、文の表面的な構造にのみ着目した分類方式であり、そのかぎりでは不備な点を含んでいることは避けられず、深層構造という概念を導入することによって、これらに必要な修正を加えるべきである、ということである。」 (P.160)

にもかかわらず、実際には5文型はあらゆる学校文法の中で決定的な位置を占め続け、教師もまた疑うことなく、受け入れているように思える。Palmer や Hornby による、より詳細な動詞型の分類も、近年ますます活用されているようだ。例えばHornbyの *Advanced Learner's Dictionary of Current English*<sup>①</sup> や、*A Guide to Patterns and Usage in English* は、少なくとも実用面ではかなりの評価を受けていると考えられるし、実際、最近我国で出版された英語辞典—新英和中辞典(研究社)、ユニオン英和辞典(研究社)、コンサイス英英辞典(三省堂)など—には、Hornbyの分類を少し手直しして活用してある。これらの辞典が以前のものに比較して、例文の提示法が優れており、英作文にも活用しやすくなったのは、やはり「文型」を常に意識しつつ、無駄なく各文型別に例文を載せる努力をするようになったからだと思われる。

このように、ますます利用されている「文型」ではあるが、満足のいく分類は現在のところまだ存在しないといってよいであろう。その原因というのが、安井も指摘している通り、いずれも文の表面構造にのみ着目して文型が分類されているということである。一例を示せば、次の文は Hornby や Palmer によれば同じ文型に属することになっている。

- (1) He likes his wife to dress well.
- (2) The officer ordered his men to advance.

確かに表面的には (1)(2) とも “accusative with infinitive” の構造を持っているが、次の一連の書き換えが示すように、動詞と目的語との関係は全く異なっている。

- (1) a. What he likes is for his wife to dress well.  
 b. He likes there to be a meeting.  
 c. \*He likes himself to dress well.<sup>②</sup>  
 d. \*His wife is liked to dress well by him.
- (2) a. \*What the officer ordered was for his men to advance.  
 b. \*The officer ordered there to be a meeting.  
 c. The officer ordered himself to advance.  
 d. His men were ordered to advance by the officer.

この一例をもってしても、単に表面形式だけの観察に基づく分類ではなく、文のより論理的関係に着目した文型を考案する必要があることが認識できよう。その時にこそ、Chomsky らの「深層構造」という概念は威力を発揮してくる。

今一つ、Hornby らの「文型」研究に於ける欠点は、「表記法」に一貫性がみられないということである。次にあげるのは Hornby の分類の一部である。

- VP1 Vb. × Simple Direct Object.  
 VP2 Vb. × (not ×) to-infinitive, etc.  
 VP10 Vb. × (pro) noun × adverbial  
 VP11 Vb. × that-clause  
 VP17 Vb. × gerund, etc.  
 VP19 Vb. × indirect object × direct object

以上の中で、“direct object” というのは文中の機能を示す概念であり、“gerund” とか “(pro)noun” などというのは語の形態や品詞名を示す概念であり、両者は峻別されるべきはずのものである。また、以上の動詞型は、このような表記法だと、それぞれ無関係のようにしか取れないが、実際には動詞の次の要素は、全て “object” という機能を共通に持っているわけで、その共通性が全く表わされていない。この欠点に対しても Chomsky の提案は、全面的には言いかねるが、有効なものであるように思える。

変形生成理論を利用して「文型」を練り直そうとする場合、以上の二点に特に留意していく必要があるであろう。

4. 次に、本稿で使用する句構造規則をあげておく。なお、規則を書く上の約束事は、普通に行なわれている通りとする。

(3) Phrase Structure Rules (PS Rules)

(i)  $S \rightarrow NP \text{ AUX VP (ADVP)}$

(ii)  $VP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} V (NP) \left( \left\{ \begin{array}{l} PP \\ S \end{array} \right\} \right) \\ \text{Cop} \left\{ \begin{array}{l} ADJ (PP) \\ NP \\ PP \end{array} \right\} \end{array} \right\}$

(iii)  $PP \rightarrow P \text{ NP}$

(iv)  $NP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} (DET) N (S) \\ (NP) S \end{array} \right\}$

(S=Sentence, NP=Noun Phrase, AUX=Auxiliary, VP=Verb Phrase, ADVP=Adverbial Phrase, V=Verb, PP=Prepositional Phrase, Cop=Copula, ADJ=Adjective, P=Preposition.

以上の PS rules の中で、AUX と ADVP は従来の文型研究と同様、一応、本稿でも取り扱うのをやめた。助動詞や副詞表現が文型に影響を及ぼす可能性は全くないとは言いつけず、もしそういう実例が見つければ、将来改訂していかねばならないが、今回はその問題は一切無視する。

(3)の PS rule を展開していくと、P-marker が得られるが、その際、各要素(文法範疇)間の関係は Chomsky (ibid., p. 71) によれば次のように定義づけられる。

- (4) (i) Subject-of: [NP, S]
- (ii) Predicate-of [VP, S]
- (iii) Direct-Object-of: [NP, VP]
- (iv) Main-Verb-of: [V, VP]

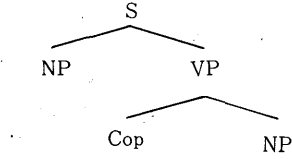
Chomsky はこれだけしかあげていないが、それ以外の機能については、その都度論じていきたい。

## 5. 深層文型一覧表

次に、単文型、複文型の一覧表と、例文を一つずつあげるが、AUX や ADVP 以外にも、例えば NP, PP, VP なども議論に無関係な場合は展開を省略してある。

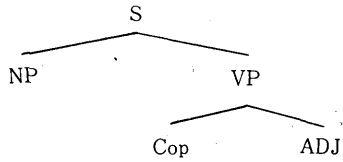
5. 1. 単文型

(S 1)



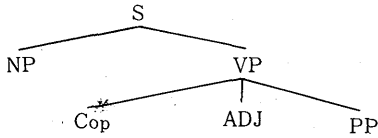
Time is money.

(S 2)



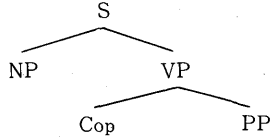
John is honest.

(S 3)



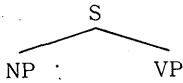
I am sorry for your failure.

(S 4)



We are of the same size.

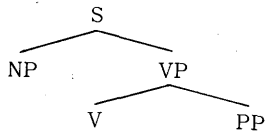
(S 5)



(A) Birds fly.

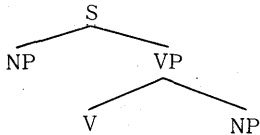
(B) He stood up.

(S 6)



His greatness lies in his character.

(S 7)



(A) He read the book.

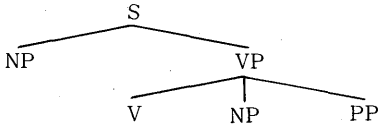
(B) He put away his books.

(C) They laughed at me.

(D) He resembles his mother.

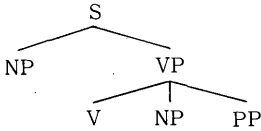
(E) I envy your beauty.

(S 8)



- (A) Dave gave a book to me.
- (B) Dave bought a book for Pete.
- (C) He suggested a new procedure to the committee.

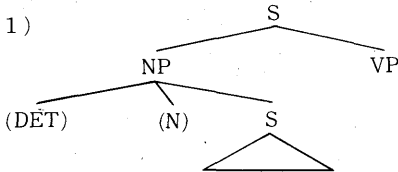
(S 9)



He persuaded the lady into marriage with him.

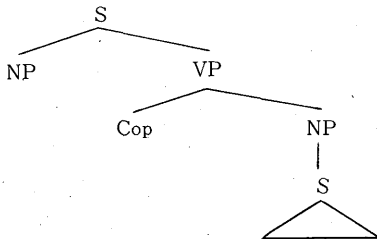
## 5. 2. 複文型

(C 1)

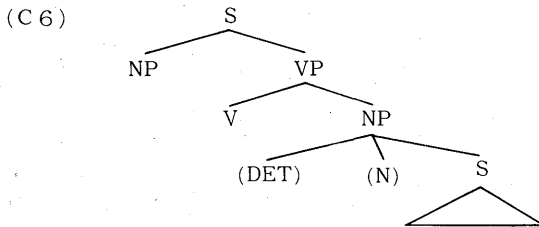
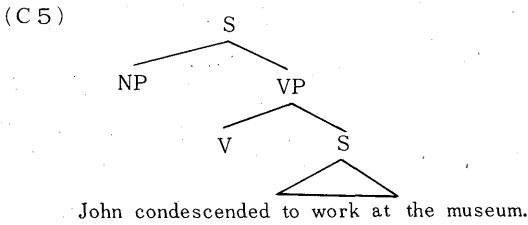
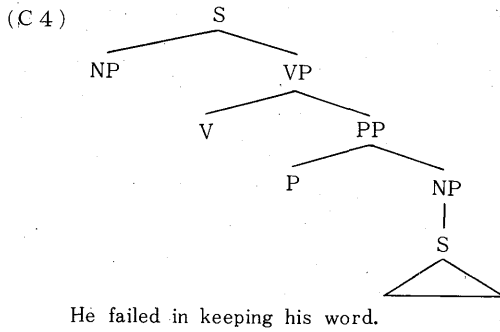
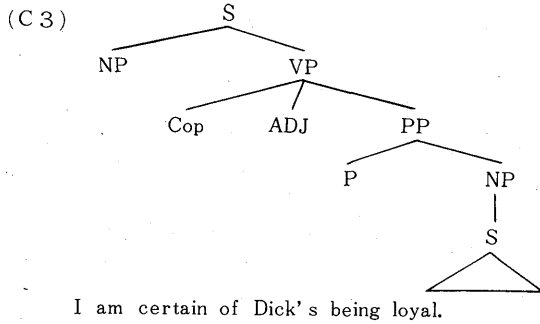


- (A) The fact that she solved the problem is significant.
- (B) That he will accomplish even more is likely.
- (C) For Tony to hit Jack was difficult.
- (D) The counselor began to ignore poor student.

(C 2)

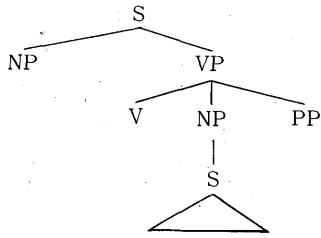


The trouble is that I am short of money.



- (A) I regret the fact that she solved the problem.  
 (B) I hate for John to leave.  
 (C) I believe John to be dishonest.

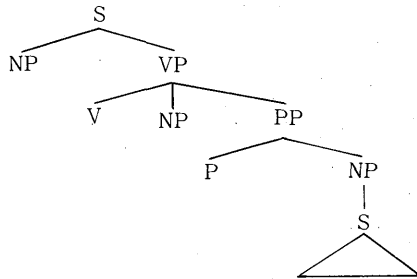
(C7)



(A) They told me that I was too early.

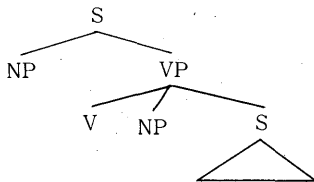
(B) Nobody expected of John that he could be so cruel.

(C8)



They forced Jack into signing the paper.

(C9)

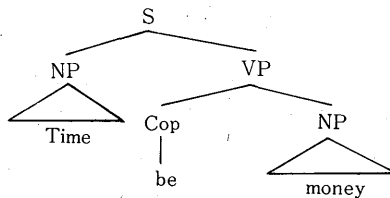


He persuaded Mary to wear the dress.

## 6. 単文型各論

6. 1. Simplex Sentence Pattern 1 (S1と省略)に lexical item を挿入した例を下に掲げる。

(5)





この枝分かれ図は、AUX, NP の展開、文境界記号#, 及び lexical rule によって導入されるそれぞれの lexical item の正確なる内部構造などが全て省略されているが、“Time is money” の簡略化された深層構造であると考えている。以下、本稿では、特別の場合を除き全て簡略化して表示することにする。

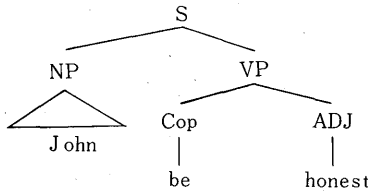
Copula 動詞は be だけであり、義務的に Cop 節点の下に導入されるが、この Cop は “predicative” と同時に VP の下に直接支配されなければならない。S1 では Cop と NP が選択された場合である。次にあげる S2, S3, S4 も Cop を取るので、同時に predicative を示す節点を選択されることになる。(4)にあげた (i) から (iv) の定義に加えて、Cop と同時に開かれる範疇の機能を次のように定義づけることを提案したい。

(6) (v)

Predicative-of :	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">Cop</td> <td style="padding: 2px 10px;">ADJ,</td> <td style="padding: 2px 10px;">VP</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">Cop</td> <td style="padding: 2px 10px;">NP,</td> <td style="padding: 2px 10px;">VP</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">Cop</td> <td style="padding: 2px 10px;">PP,</td> <td style="padding: 2px 10px;">VP.</td> </tr> </table>	Cop	ADJ,	VP	Cop	NP,	VP	Cop	PP,	VP.
Cop	ADJ,	VP								
Cop	NP,	VP								
Cop	PP,	VP.								

6. 2. S2 の例として “John is honest” の深層構造を次に示そう。

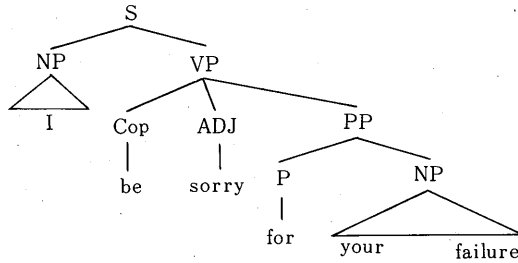
(7)



何人かの変形文法学者は形容詞を main verb とし、be を auxiliary として分析しているが、本稿ではその立場を採用しない。強力な理由があるわけではないが、もし be を auxiliary とし、ADJ が main verb であるとするならば S1, S4 に於ける NP や PP も同様に main verb として分析されねばならなくなり、問題が複雑になるように思われるからである。

6. 3. S3 の例として “I am sorry for your failure” の深層構造を示そう。

(8)

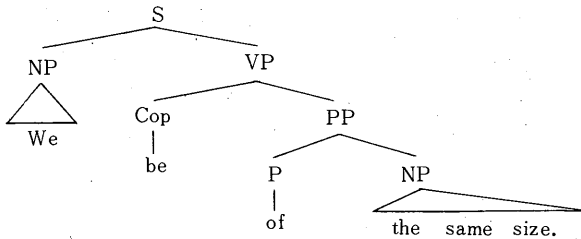


Cop と並んで開かれた ADJ の機能は Predicative と呼ぶことを先程、提案したが、VP に直接支配されている PP に関しては適切な機能名が見当たらない。中島文雄が「英文法の体系」で使用している“adverbial complement”は必ずしも全面的にこのPP と一致してはいないが、最も近いように思われるので、ここで借用して、次のように(4)の定義に付加したい。

(9) (vi) Adverbial-Complement-of: [PP, VP]

6. 4. S4 の例として “We are of the same size” の深層構造を下に示そう。

(10)



この深層構造に “Preposition Deletion” 変形が適用された場合 “We are the same size” となり、表層構造を見る限りでは S1 と同じ NP+Cop+NP であるが、深層文型は明らかに異なっている。

この文型に属する例文を幾つかあげておこう。

(11) The chimneys are (of) the same height.

It is (of) no use.<sup>③</sup>

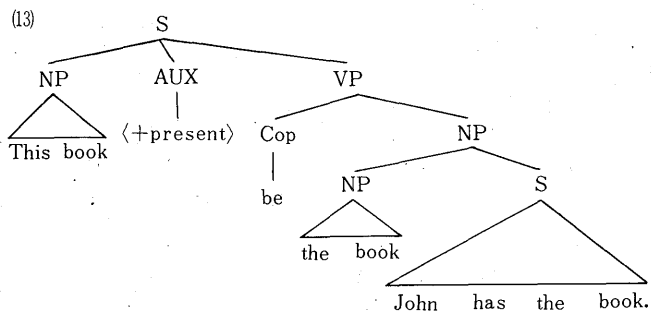
I am of your opinion.

She is in good health.

以上の他, S1~S4のどれに入れてよいか迷うような例がある。例えば,

- (12) a. This book is John's.  
 b. He is out.  
 c. This book is for you.  
 d. John is in the garden.

(12) a の深層構造は概略次のようであったと考えられる。



この形から “This book is the book which John has.” となり “This book is John's book” のような中間構造を経て(12) a の表層構造になったと考えればこの文は S1 に属することになる。

(12) b の “out” は、普通、副詞と解されているが、そうだとすれば be は copula ではなく true verb ということになる。または “out” を predicative と解して、形容詞相当語句にとり、S2 の例とも考えられるが、ここでは結論を出せない。

(12) c の be も copula ではなく “be intended” のような意味を持った true verb と考えた方が良くかもしれない。

(12) d は鈴木英一 (『There 構文覚え書き』) が true verb の be の例として論じているものである。その証明として Pseudo Cleft Test を次のように行なっているが、これだけで証明できるのであろうか?

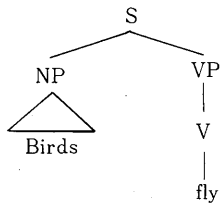
(14) a. Where (\*what) John is is in the garden.

b. What (\*where) John is is in good health.

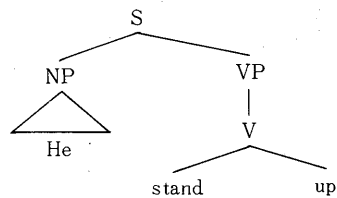
これら(12)のような文は、またの機会に考え直してみたい。

6. 5. S5は subjectNP と完全自動詞から構成されている文型で、特別取りあげるべき問題もないが、従来 intransitive verb + particle と解されてきた “stand up” のような場合も、本稿では単一の構成素とみなし、lexical rule によって V の下に同時に導入されると考える。“Birds fly” と “He stood up” の深層構造は概略次のようになる。

(15)



(16)



6. 6. S6に含まれる文は次のようなものである。

(17) His greatness lies in his character.

The plan resulted in failure.

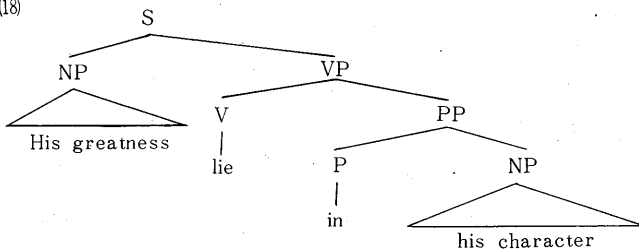
A week consists of seven days.

He acted as an interpreter.

‘B. C.’ stands for ‘before Christ.’

最初の文の深層構造は次のようであったと仮定する。

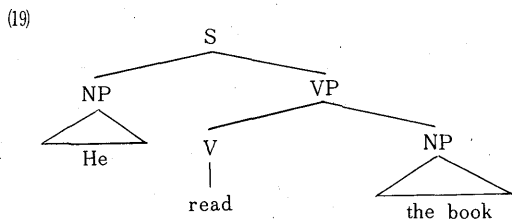
(18)



このPPの機能は、(9)で付加した “Adverbial complement” と同一と考えてよいであろう。

6. 7. S7は transitive verb + objectNP の構造を持つ文型であるが、各文の特性によって、五種類に下位分類する。

6. 7. 1. S7の最初のタイプ (S7Aと呼んでおく) は次の例のような最も典型的な文の集合である。



6. 7. 2. 第二のグループ (S7B) は, S5でふれた “stand up” と同様, particle 付きの動詞をとるものであるが, この文型では transitive verb + particle の形になり, 全体で一つの構成要素と見なすことにしたい。

このことは次のように受身文にしても切り離されず共に行動していることから支持されよう。

(20) He *put away* his books.

⇒ His books were *put away* by him.

He *looked up* the information.

⇒ The information was *looked up* by him.

Lees (*The Grammar of English Nominalizations*, pp. 64-68) が, “action nominal” と “gerundive nominal” を区別するために考案した “Action Nominal”<sup>④</sup> テストも, 動詞と particle が一つの単位であり, かつ particle と前置詞は別のものであることを証明するのに利用できる。次の a と b を比較されたい。

(21) a. His *putting away* of his books. . . .

His *looking up* of the information. . .

b. His disclosing of the information. . . .

さらに Fraser (“Some remarks on the action nominalization in English” p. 92) の観察によれば, particle を object のうしろに移動した形 “He looks the information up” に対応する “action nominal” を作ることはできない。

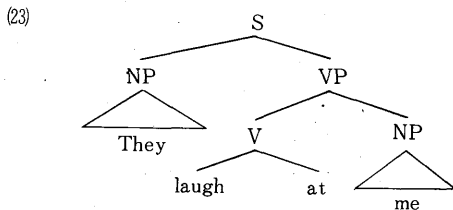
(22) \*His *looking* of the information *up*. . .

\*His *putting* of his books *away*. . .

このことは、particle が深層構造で object の後にあったのではないことの強力な証拠になりうるが、しかし、安井（「英語学の世界」p. 23）が指摘している通り「なんらかの変形を受けた結果得られた構造から名詞的動名詞（本稿での action nominal のこと）を導くことはできない」ということを証明しなければならない。しかしながら、この言語事実も verb + particle を一単位と見ることの間接的支持にはなるであらう。

このような統語的証拠に加えて、verb + particle の結合体を深層構造では単一の構成素とみなすことによって、こういった表現特有の熟語的意味を解釈するのが容易になるだろうとも考えられるのである。

6. 7. 3 S7の第3のグループ（S7C）は“*They laughed at me*”のような文を含む。



この文型は表層構造を見る限りではS6と区別がつかないが、S6の文は受動化が不可能であるのに対し、このS7Cは動詞と前置詞が密接な結合体となっていて、目的語をとり、しかも受動化が可能である。次を比較されたい。

(24) a. *They laughed at me* (S7C)

⇒ *I was laughed at by them.*

b. *His greatness lies in his character* (S6)

⇒ \**His character is lain in by his greatness.*

このように全体で単一の他動詞と同じ働きをする表現は数多くあるが、次に示すような idiom は全てこの文型をとる。

(25) account for, answer for, approve of, ask for, care for, do without, hit upon, impose upon, listen to, look at, look for, look into, rely on, speak to, think of, tell about, wait for, . . . ⑤

catch up with (=overtake), do away with (=abolish), fall in with (=accept), keep in with (=defend), fall in love with, get hold of, lose sight of, make a fuss of, make fun of, take care of, . . .

すでに言及した verb + particle の結合体と同様、本稿ではこれらの前置詞つきの idiom も単一の構成要素であり、lexicon では独立した lexical item であると考えていきたい。

序でながら、S7BとS7Cの動詞表現には、particle か preposition か、一見識別し難いものがあるが、この区別には既にふれた“Action Nominal”テストが有効である。次のaとbを比較されたい。

- (26) a. Their *laughing at* me. . .  
           His *looking into* the information. . .  
       b. His *looking up* of the information. . .  
           Her *putting on* of her things. . .

(26b)の“up”や“on”はparticleであるから前置詞“of”が入っているが(26a)には挿入できない。

6. 7. 4 S7の第4のグループ(S7D)は、普通“middle verb”と呼ばれる他動詞をとる文型で次のような文を含む。

- (27) He resembles his father.  
       Ed has a good library.  
       The beard suits his personality.  
       He sat the horse very badly.

“middle verb”を選出するテストは二通りある。第一は、middle verbをとる文は次のように受動化が不可能である。

- (28) \*His father is resembled by him.<sup>⑤</sup>  
       \*A good library is had by Ed.  
       \*His personality is suited by the beard.  
       \*The horse was sat very badly by him.

第二は、S7A, B, Cに於ては、“action nominal”をつくることが可能であったが、“middle verb”をとるS7Dでは不可能である。

- (29) His disclosing of the information. . . (S7A)

His looking up of the information. . . (S7B)

His looking into the information. . . (S7C)

\*His resembling of his father. . . (S7D)

\*Ed's having of a good library. . . (S7D)

以上のような middle verb をとる文に加えて, pride, avail などのように常に再帰代名詞を目的語にとる動詞もS7Dのグループに加えてよいであろう。

(30) She prides herself on her good looks.

He availed himself of this chance.

こういう文は, Postal の “Cross-Over constraint” により, 同一指示句が互いに交差するのを禁じられており, それを犯せば次のように非文法的な文になる。

(31) \*  $\left. \begin{array}{l} \text{She} \\ \text{Herself} \end{array} \right\}$  is prided by  $\left. \begin{array}{l} \text{herself} \\ \text{her} \end{array} \right\}$  on her good looks.

\*  $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{Himself} \end{array} \right\}$  is availed by  $\left. \begin{array}{l} \text{himself} \\ \text{him} \end{array} \right\}$  of this chance.

6. 7. 5. S7の第5のグループ(S7E)に関しては, 多少大胆な仮説を含んでいるため, 少しく詳細に論じたい。

Jespersen (*M. E. G.*, III, p. 295) は “Two Direct Objects” の節で次のような例をあげている。

(32) strike him  
strike a heavy blow } strike him a heavy blow

I envy you  
I envy your beauty } I envy you your beauty

hear me  
hear one word } hear me one word

answer me  
answer this question } answer me this question

ask John  
ask a question } ask John a few question

take the boy (out)  
take a long walk } take the boy a long walk



forgive me	} forgive me my sins
forgive my sins	

さらに続けて、彼は次のように述べている。

“In all the combinations placed in the left-hand column we speak of (direct) objects (some of them instrumental objects): may we not then in those in the right-hand column speak of two objects and call them both direct objects?”

確かに、表層構造を見る限りでは、どちらも direct object だと考えられるが、Jespersen のあげている例のうち幾つかは indirect object と direct object の組み合わせと解釈した方がよいものもある。例えば、

(33) Answer this question to me.

⇒Answer me this question.

Ask a few questions of John.

⇒Ask John a few questions.

しかしながら、次にあげる例は、間違いなく direct object が二つあると考えざるをえないであろう。

(34) I envy (you) your beauty.

Forgive (me) my sins.

Pardon (me) my offence.

Spare (me) my life.

Will you hear (me) my lessons, please?

( ) をした object は、米語では現在、普通には省略されるが、英国では ( ) の object を使用する言い方も、使用しない言い方も、どちらも可能である。

これらの表現はしばらくおいて、次の(35)と(36)を比較されたい。

(35) Mary pinched John on the nose.

He struck me on the head.

The boy bit her in the neck.

(36) Mary pinched John's nose.

He struck my head.

The boy bit her neck.

英語教育の現場に於て、(35)は英語独特の表現法であるという説明はよく聞くとこで  
あり、しばしば(36)の形が非難される場合さえあるように思われる。確かに(35)の方が文  
体的には、より idiomatic であるが(36)の表現も不可能ではない。わずかなニュアンス  
の差はあるかも知れないが、(35)と(36)は論理的には同義であると考えてよいであろう。  
実際 Fillmore は “The case for case” に於て、格文法のわく組内ではあるが、(35)  
と(36)には共通の深層構造を与えている。

しかしながら、Chomsky は “Some empirical issues in the theory of trans-  
formational grammar” の中で、次のように Fillmore に反論を加えている。

“(74) (i) Mary pinched John on the nose.

(ii) Mary pinched John's nose.

Fillmore would derive these forms from (75), by a Category I rule analogous  
to the rule of subject-choosing just discussed:

(75) [V, *pinch*], [loc, *John's nose*], [agent, *Mary*].

... Here, too, however, the analysis seems to me defective. Thus suppose  
that *pinch* is replaced by *pull* in (75). Then we can have the analogue to  
(74) (ii), but not (74) (i).”

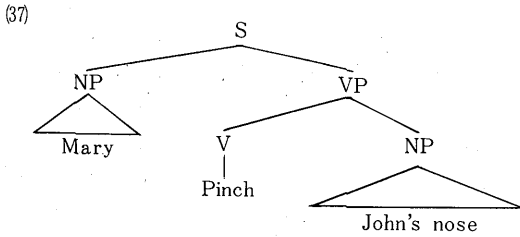
この “pinch” と “pull” の置換は、正当な反論にはなりえない。というのは、“pull”  
は(35)で使用された “pinch” のような動詞類とは種類が異なっているからである。それ  
でも、Chomsky は脚注48に於て、さらに次のように説明している。

“There is, of course, the sentence *Mary pulled John by the nose*, but  
this surely must have a very different source, if meaning is to be  
expressed correctly. Similarly, compare *Mary pulled John's hair*,  
*Mary pulled John by the hair*. \**Mary pinched John on the hair*, etc.”

この脚注の説明は、ならん Fillmore の反証にはなりえず、むしろ表層では類似の文  
も、動詞の特性によっては区別すべきであるということを手張したにすぎない。

Chomsky は、“pull” に置き換えて議論をすすめるかわりに、なぜ “pinch” の場合に  
は(74) (i) と (ii) のような表現が存在するのかを論じるべきであったと思う。

そこで、本稿に於ては、(35)と(36)は共通の深層構造により派生されたと仮定する立場  
をとり、次のような深層構造を考える。



上図に於て、“John’s” という genitive は問題のあるところであり、Fillmore はこれを Dative case から変形によって導いている。彼の議論も説得力はあるが、格文法というわく組みの違いもあり、本稿では彼の立場をとらず、敢えて彼の間中構造にあたる(37)を深層構造と仮定しておく。この深層構造から(36)は容易に派生できるが(35)を派生するためには、我々は次のように目的語の “head” noun と “genitive” noun を分離するような変形規則を仮定する必要がある。

(38) [John’s nose] ⇔ [John] [on the nose]

[my head] ⇔ [me] [on the head]

ここで注意すべきは、これに類似した変形規則が(34)であげた表現を生成するために必要になることである。

(39) I envy [your beauty]

⇔ I envy [you] [your beauty]

Forgive [my sins]

⇔ Forgive [me] [my sins]

勿論(38)と(39)で仮定した変形規則は、厳密には、全く同一であるというわけにはいかないかも知れない。しかしながら、両者は次のような共通性を有している：(38)と(39)の深層及び表層文のどちらも類似の意味関係を持っている。つまり objectNP の前半部は “whole” body を示し、後半部は subjectNP がそれに対して心的又は肉体的働きかけを与えるところの具体的目標を示していると言える。

以上の考察から、従来比較的例外扱いを受けてきた(34)(35)(36)は共通性を有し、深層文型はS7で同一であることを提唱したい。

6. 8. S8は direct object を示す NP に加えて、 indirect object を示す NP ないし PP をとる文型を全て含むこととし、次のような例を典型と考える。

- (40) a. Dave sold a book to Pete.  
b. Dave sold Pete a book.
- (41) a. Dave bought a book for Pete.  
b. Dave bought Pete a book.

a と b が論理上同義であることは明らかであり、“Dative Shift” 変形によって関係づけられていると仮定することは正しいであろう。問題は、深層構造を a により近くなるか、b により近くなるかであり、これに関しては、現在までのところ決定的な議論は提出されていないようである。本稿では indirect object が文末にくる a 形の方を、より深層構造に近似した形と考える立場をとり、幾つか支持的証拠をあげたい。

Jackendoff (*Semantic Interpretation in Generative Grammar*, p. 156) は次のように述べている。

“Which member of the pairs above has the underlying order of objects? I maintain that the upper member (=a) is more primitive since the order of complements NP-PP is widespread in English and hence a plausible base rule, whereas the order PP-NP is unknown except in these two constructions (=40b. 41b の基本形) and the order NP-NP is rare. Hence for economy in the base it seems wiser to assume that the dative rules produce 40b from 40a and 41b from 41a.”

Postal (*Cross-Over Phenomena*, p. 126) も同様のことを次のように述べている。

“Certain weak evidence for taking the a forms as basic derives from the field of exceptions. There are many instances of verbal forms which occur only in the a form.

- (I) I explained the problem to Humphrey.  
(II) \*I explained Humphrey the problem.

There are, however, hardly any cases of verbal forms restricted to b structures.”

実際、私の調査した限りに於ても、b 形だけにしか使用できない動詞は、ついに一語も発見されなかった。もしこのことが事実なら、a 形支持のかなり強い証拠になると思われる。

さらに、次の(42)と(43)を比較されたい。

(42) Dave's sale of a book to Pete.

? Dave's sale to Pete of a book

\* Dave's sale Pete of a book.

(43) Dave's painting of a picture for Mary.

\* Dave's painting for Mary of a picture.

\* Dave's painting Mary of a picture.

これは Jackendoff (ibid., p. 156) のとりあげている例だが、この名詞化した表現に於て indirect object に相当する "Pete" と "Mary" が direct object を示す "a book" と "a picture" の後にきた場合にのみ完全に文法的であるという事実は、Fraser (ibid., p. 92) もすでに指摘している通り、深層構造では direct object が動詞の直後にくると考えた方が説明が易しい。

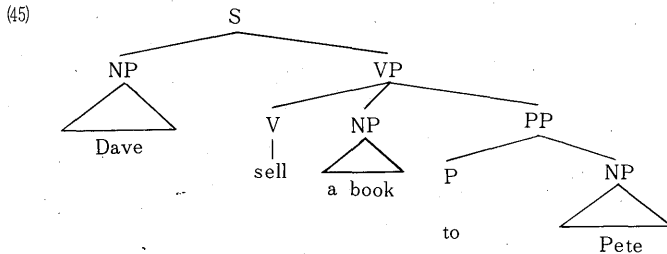
もう一つ、Postal (ibid., p. 126) のやや "tricky" な議論を紹介したい。

(44) a. \*I gave Charley to himself.

b. \*I gave Charley himself.

これは a, b, 共に非文法的であるが Postal にとっては b よりも a の方が多少はましであるという。この事実に基いて、彼は、b が "cross-over" の原則を破って同一指示句が direct object を飛び越えて移動したと類推している。彼の提案する "cross-over" の原則はかなり有効だと考えられるし、また(44) b が "doubly" ill-formed であるとすれば、a 形を間接的に支持する証拠となりうる。

以上のような考察に基いて、(40) a, b の深層構造を次のように仮定する。



次に、(40) a を(40) b に変える "Dative Shift" 変形と、(41) a を(41) b に変える "Dative Shift" 変形が同一の規則でよいのかどうかという問題に話を進めたい。まず、(46)と(47)

を比較されたい。

- (46) a. Dave sold a book to Pete.  
b. Dave sold Pete a book.  
c. A book was sold to Pete by Dave.  
d. Pete was sold a book by Dave.  
e. A book was sold by Dave to Pete.
- (47) a. Dave bought a book for Pete.  
b. Dave bought Pete a book.  
c. A book was bought for Pete by Dave.  
d. \*Pete was bought a book by Dave.  
e. A book was bought by Dave for Pete.

(47)d の生成を防ぐには、“*To Dative Shift*”規則と“*For Dative Shift*”を分離し、さらに“*Passive*”変形の後に“*For Dative Shift*”変形がかかるような規則の順序づけを行なう方法が普通考えられている<sup>⑦</sup>。“*For Dative Shift*”と“*To Dative Shift*”変形を分離すべき一番強力な理由は、以上の(46)d と(47)d に関する文法性の相違であるが、もっと間接的な事実を一つあげてみたい。

次の(48)と(49)を比較されたい。

- (48) a. The secretary *sent out* a schedule *to* the stockholders.  
b. The secretary *sent* a schedule *out to* the stockholders.  
c. \*The secretary *sent* a schedule *to* the stockholders *out*.  
d. ?The secretary *sent out* the stockholders a schedule.  
e. The secretary *sent* the stockholders *out* a schedule.  
f. \*The secretary *sent* the stockholders a schedule *out*.
- (49) a. He has *brought down* some cigars *for* Dad.  
b. He has *brought* some cigars *down for* Dad.  
c. \*He has *brought* some cigars *for* Dad *down*.  
d. ?He has *brought down* Dad some cigars.  
e. He has *brought* Dad *down* some cigars.  
f. \*He has *brought* Dad some cigars *down*.

これは Emonds が“Evidence that indirect object movement is a structure-

preserving rule” (pp. 10-13) であげているもので、特に(48)dと(49)dに関しては、三種類の方言があることを報告している。どちらのdも容認可能であるとする方言、どちらも認めない方言、それに(48)dは容認可能であるが、(49)dは認められない方言の三種であるが、今、問題にしたいのは三番目の方言で、(48)dは *to-dative* をとる文であるのに対し、(49)dは *for-dative* をとる文であることの相違が反映していると考えられる。従って、この相違も、“*To Dative Shift*”と“*For Dative Shift*”変形を分離すべき間接的な証拠にはなりうる。なぜなら、もし“*Dative Shift*”規則を一種類だけにすると、三番目の方言で、(48)dは許して(49)dのような文はブロックするという特別な *ad hoc* な条件が必要になるからである。

*to-dative* と *for-dative* に加えて、次のような場合も、“*Dative Shift*”規則で、aとbが関係づけられていると考えられる。

- (50) a. Dave played a trick on Pete.  
       b. Dave played Pete a trick.
- (51) a. Dave asked a question of Pete.  
       b. Dave asked Pete a question.

これら *on-dative* や *of-dative* の移動規則は、既に述べてきた *to-dative* や *for-dative* の規則とはさらに別のものであろうか？ これを確かめるために受動化テストを次のように行なう。

- (52) A trick was played on Pete by Dave.  
       Pete was played a trick by Dave.
- (53) A question was asked of Pete by Dave.  
       Pete was asked a question by Dave.

direct object だけでなく、indirect object を主語にした受動文も、生成を許されていることから、これら *on-dative* や *of-dative* も *to-dative* をもつ文と全く同じ行動を示すことがわかる。そこで、従来“*To Dative Shift*”変形と呼ばれてきた規則は、より適用範囲を拡張して、“*To-On-Of Dative Shift*”規則と改めることを提案したい。

以上の議論により、今までのところ、S 8に次の二つのグループを認めることになる。

(S 8A)・・・“*To-On-Of Dative Shift*”規則と“*Passive*”規則を自由に適用

できる文型。

(e. g.) Dave sold (gave, handed, read, . . . ) a book to Pete.

Dave played a trick on Pete.

Dave asked a question of Pete.

(S8B) . . . “For Dative Shift” 規則は適用可能であるが、indirect object を受動文の主語にできない文型。

(e. g.) Dave bought (got, made, ordered, . . . ) a book for Pete.

このS8A, S8Bに加えて、次のような文をS8Cの例と考える。

(54) He suggested a new procedure to the committee.

I explained the problem to Humphrey.

He introduced Agnes to me.

The teacher pronounced the word for us.

She closed the window for the baby.

これらの文には“Dative Shift”変形を適用することは不可能であり、次のようになってしまう。

(55) \*He suggested the committee a new procedure.

\*The teacher pronounced us the word.

また、indirect object を受動文の主語にすることもできない。

(56) \*The committee was suggested a new procedure by him.

\*We were pronounced the word by the teacher.

以上の外に、方言差が原因で、S8A, B, Cのどれか決定し難く、慣用の定まっていない例も、この型には時々見い出される。

(57) a. He opened the door for (to) me.

b. ?He opened me the door.

(58) a. She answered the question for Charles.

b. ?She answered Charles the question.

我国で出版されている英語辞典には(57)b, (58)bのような例文が、何の注釈もなく掲載されている場合が多いが、これらを認めない英米人は多いのである。<sup>⑧</sup>

dative object に関する考察を終える前に、今では archaic な用法となってしまう



った “Ethical dative” について触れておきたい。

(59) That was *you* a joy!

Now heed *me* that!

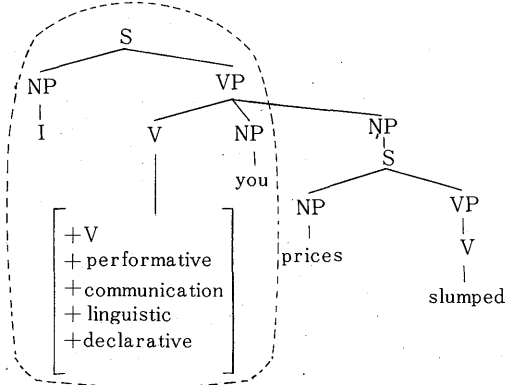
この “you” や “me” は、「述べる事柄に関して話し手が関心を持っていることを示し、または聞き手の関心を呼び起こすために挿入される」(清水護編「英文法辞典」, p. 253) もので、現代英語であれば(59)は次のように言うのが普通であると Curme (*Syntax*, p. 108) は述べている。

(60) That was a joy, I tell you!

Now I want you to head that!

この言い換えは、Ross などの提唱している performative analysis が、Ethical dative の解明に有効であることを想起させてくれる。performative analysis は、illocutionary force を深層構造において直接表示することを目指したと考えてよいが、例えば Ross (“On declarative sentences”) は、“Prices slumped” を次のような構造から導くことを提案している。

(61)



(61)の点線で囲んだ部分を削除する “performative deletion” という規則を彼は提案しているが、勿論、削除されない場合には “I tell you that prices slumped” のような形になると考えられる。ここまで述べれば、既に、(59)のような Ethical dative を含んだ文の深層構造をどのように設定すべきかに関するヒントは与えられている。つまり、(59)の “you” や “me” は、(61)中の performative clause のような higher sentence の「生き残り」であり、それを許すためには、Ross の “performative

deletion”とは異なる規則が、古い英語にはあったと考えればよい。

以上の考察より、Ethical dative を含む(59)のような文は、S8に所属しないものとする。

6. 9. 単文型の最後の節で扱う文型S9は、次のような文を含むものとする。

(62) He persuaded the lady into marriage with him.

She dissuaded him from the plan.

Something impelled them to action.

Failure drove him into desparation.

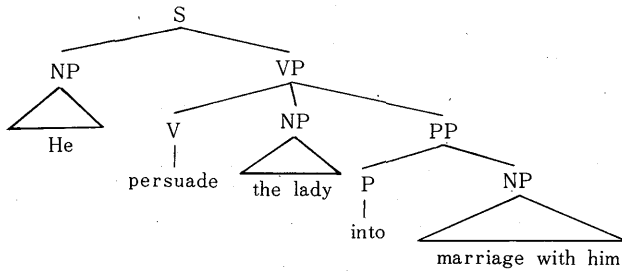
I coaxed him out of his plan.

I suspected him of a crime.

She accused him of theft.

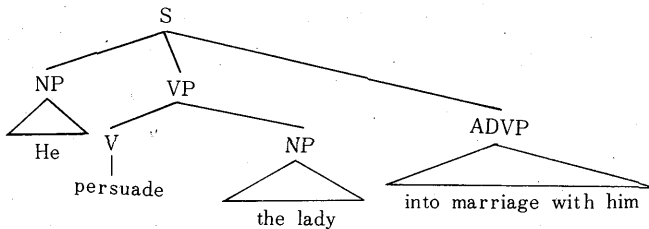
一等最初の文の深層構造は概略次のようになる。

(63)



VPの下にPPを支配させないで、PPの部分を adverbial と考えて次のような深層構造を提案する人がいるかも知れない。

(64)



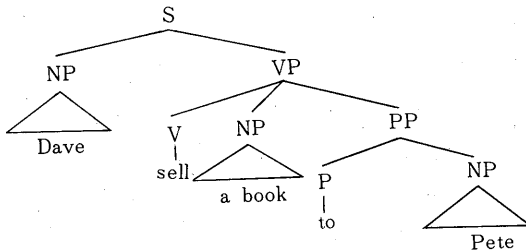
しかしながら、この代案は、“do so” テストによって、PPはVPの内部になければならないことが次のように証明されるので、採用できない。

- (65) a. He persuaded the lady into marriage with him and I did so too.  
 b. \*He persuaded the lady into marriage with him and I did so into quarreling with him.
- (66) a. Mary accused John of theft and I did so too.  
 b. \*Mary accused John of theft and I did so of murder.

そこで、(63)の深層構造は一応正当化されたわけであるが、その中のPP節点がどうい  
 う機能を持つかという問題が出てくる。VP に直接支配されるPP は、実は既にS3、  
 S4、S6 に現われており、このS9のPPも同様であるから、一括して、6. 3. の  
 (9)で付加した“Adverbial- Complement- of”の名称で、この[PP, VP]の文法関係  
 を表わすことにしたい。ところが、ここで大きな問題に直面する。

S8には indirect object を示すPPがあったが、このPPも、やはりVPに直接支  
 配されていたことを思い出されたい。S8の例として、次にもう一度(45)の枝分かれ図  
 を書き写すので(63)の枝分かれ図と比較されたい。

(67) (=45)



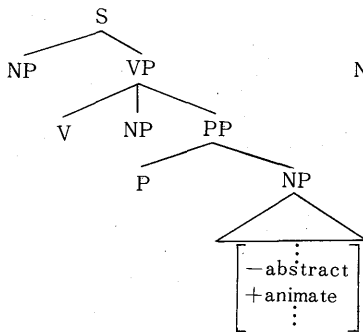
この(67)に於けるPPは indirect object を示すものであり、“adverbial complement”  
 を示す(63)のPPとは、内部特性の組成が異なることは明らかであろう。つまり indirect  
 object NP には [+animate] とか [-abstract] などのような特性が含まれている  
 のに対して、“adverbial complement”のPPに支配されているPPには、  
 [-animate] とか [+abstract] のような特性が含まれており、従って それぞれの  
 文の深層構造は、省略なしに詳しく図示されるならば、S8とS9のPPは明らかに区  
 別できるであろう。

しかしながら、lexical item 挿入以前の preterminal strings の枝分かれ図によって、本稿の文型分類はなされてきたのであるから、(63)と(67)は区別できないことになってしまうのである。S8のPPとS9のPPは、その内部特性も、VP に対する文法関係も異なることは今まで述べた通りであるから、それを区別しえない Chomsky 流のやり方には問題点があることになる。そうすると次のような Chomsky の大前提も再考を余儀なくされるかも知れない。

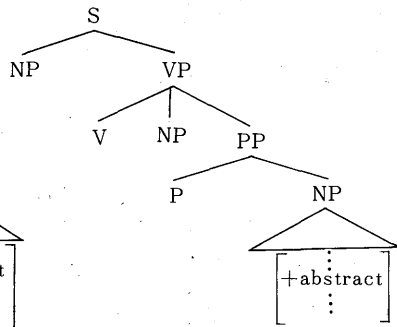
“... it seems unnecessary to extend the system of rewriting rules in order to accommodate information of the sort presented in (2 ii) (i.e., relational notions). With appropriate general definitions of the relational notions involved, this information can be extracted directly from Phrase-markers that are generated by simple rewriting rules such as (5) and (12). This information is already contained, implicitly, in the system of elementary rewriting rules.” (*Aspects of the Theory of Syntax*, p.74)

いずれにしろ、S8とS9は、文型一覧表を見た時に区別される必要があるが、Chomsky 流の文法関係の定義の仕方を踏襲する限り、それらの機能を区別するのは不可能であり、結局 PP に支配されている NP の内部特性を、文型一覧表に書き込むしか方法はないように思える。5. 1. の一覧表中S8とS9は次のように示す方が、もっと正確であることをここで断わっておきたい。(1974年9月30日)

(S8')



(S9')



注

※本稿は、もともと1974年1月、国際基督教大学大学院に提出した修士論文に大幅に

手を加え、日本語で書き改めたもので、複文型の研究を含む第Ⅱ部は、次回発表の予定である。

①これは、間もなく改訂版が発行され、動詞型にも改訂が施してあるらしいが、執筆時までに入手できなかった。

②asterisk (\*) は、その文が統語的又は意味的に逸脱している時に付けられる。

③Sweet は *New English Grammar*, II, p. 49 で次のように述べている。

“This construction (e. g., it is no use) apparently began through dropping a preposition, for we can still say in the above examples of no use. . .”

Onions (*Modern English Syntax*, p. 87) も同様の見解を述べていて、本稿の立場を支持している。

④Chomsky は “Remarks on nominalization” に於て、“derived nominals” (そして恐らく “action nominal” も) は変形体というより、むしろ基底部の規則で直接生成することを提案している。しかしながら、“action nominal” を本稿のようにテストに使用することは、全く差し支えあるまい。

⑤Rosenbaum (*The Grammar of English Predicate Complement Constructions*) は、これらの表現のうち、hit upon, impose upon, rely onなどを oblique Verb Phrase Complementation をとる動詞の中に入れてある。しかしながら本稿では、これらの表現も直接目的語をとり、受動化が可能なので、S 7をとるグループに入れた。次の例を見られたい。

He cannot be *relied upon*.

She is easily *imposed upon*.

A bright idea has been *hit upon* by accident.

⑥“resemble”を受身にした例は、普通見当たらないが、Jespersen (*M. E. G.* III, p. 300)によると、“I have found one example of the passive: Bradley Sh. Trag. 55 in the result of this peculiarity it (Othello) is resembled only by Ant. & Cleop.” さすがである。

⑦この “Dative Shift” 規則の順序づけについては Fillmore が *Indirect Object Constructions in English and the Ordering of Transformations* に於て最初

---

に論じたが、筆者未見につき、Postal (ibid., pp.128-129) を参照した。

⑧例えば Politzer and Politzer の *Teaching English as a Second Language*, p. 170 を参照。

参 考 文 献 (第 I 部で使用したもののみ)

- Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press, 1965.
- , “Remarks on nominalization” in Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, Waltham, Mass.: Blaisdell, 1970.
- , “Some empirical issues in the theory of transformational Grammar” in Chomsky, *Studies on Semantics in Generative Grammar*. The Hague: Mouton, 1972.
- Curme, George O. *Syntax*. Boston: Heath, 1931.
- Emonds Joseph E. “Evidence that indirect object movement is a structure-preserving rule.” Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, 1972.
- Fillmore, Charles. “The case for case,” in Bach and Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968.
- Fraser, Bruce, “Some remarks on the action nominalization in English,” in Jacobs and Rosenbaum (eds.) 1970.
- Hornby, Albert S. *A Guide to Patterns and Usage in English*. 研究社, 1956.
- Jackendoff, Ray S. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge. Mass.: M. I. T. Press, 1972.
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, III. London: George Allen & Unwin, 1927.
- Lees. Robert B. *The Grammar of English Nominalizations*. The Hague: Mouton, 1960.
- 中島文雄. 「英文法の体系」 研究社, 1961.

- Onions, Charles T. *Modern English Syntax*, revised by Miller, B. D. H.  
London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Palmer, Harold E. *A Grammar of English Words*. London: Longmans, 1938.
- Politzer, Robert L. and Politzer, Frieda N. *Teaching English as a Second Language*. Lexington, Mass.: Xerox College Publishing, 1972.
- Postal, Paul M. *Cross-Over Phenomena*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971.
- Rosenbaum, Peter S. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press, 1967.
- Ross, John R. "On declarative sentences," in Jacobs and Rosenbaum (eds.)  
1970.
- 清水 護編. 「英文法辞典」 培風館, 1965.
- 鈴木英一. "There 構文覚え書き" in 「英語青年」 Vol. 119, pp. 399-400, 研究社,  
1973.
- Sweet, Henry. *A New English Grammar*. 2 vols. London: Oxford Univ.  
Press. 1891, 1898.
- 安井 稔. 「英語教育の中の英語学」 大修館, 1973.
- \_\_\_\_\_, 「英語学の世界」 大修館, 1974.